〈書評論文〉

エイセクシュアル・エロティクス
―― 強制的なセクシュアリティの親密な読解 ――

Ela Przybylo,
Asexual Erotics:
Intimate Readings of Compulsory Sexuality
（Ohio State University Press, 2019）

亀　山　哲　寛

1　はじめに

本書はイリノイ州立大学の英語学科准教授 Ela Przybyło による著作である。Przybyło はフェミニズムやクィア理論とエイセクシュアルとの交差について複数の論文を発表しており、人文・社会科学の分野でのエイセクシュアル研究において最も影響力の大きい著者の一人であるが、本書はエセクシュアルに関する単著としては初めてのものである。本書また、エイセクシュアルを主題とした文献としても人文・社会科学の分野では初の単著であるが、エイセクシュアルの理論的可能性を深く追求している点で学術的価値が非常に高い。

2　内容の概観

以下、著者の主張を要約する。概観するという都合上、イントロダクションの内容、特に方法論や観点に紙幅を多く割く。

イントロダクションの内容は以下の通りである。アイデンティティとしてのエイセクシュアルのように特定の要素に還元することを拒否し、それによって何が失われているの

かを問う。その上で、性的な惹かれに基づいて理解されてきた性的指向や、アイデンティティとしてのエイセクシュアルを概略し、領域横断的にエイセクシュアルを読解する。まず、性的なアイデンティティを決定する上でセックスが中心的な役割を果たしてきたのは、セクシュアリティが白人中心で規範的で能力主義的な異性愛を持続させるために植民地的に押し付けられた結果である。また、エイセクシュアリティの研究において、健康科学と医学が「真実」に基づいたものとされてきた。その結果、健康や規範と性欲や性的な惹かれとが結び付けられ、病理化という形で強制的なセクシュアリティ（compulsory sexuality）が働いている。このように、科学的な研究はエイセクシュアリティのための例外を作ったとしても、セクシュアリティを押し付けるための中心的な役割を果たしている。

他方で、著者が依拠する共鳴と交差性（resonances and intersectionality）を重視する。そして、クィア理論やフェミニストによるアプローチに基づく研究を、以下の点を評価する。

① 複数化

定義の拡大や流動性を認めることで、「生涯続く」と仮定する Anthony Bogaert らによる研究や、低い性欲を病理的に解釈する医療モデルへの対抗している。

② アーカイブの拡大

シスジェンダー、男性、白人の規範と結びついてきたエイセクシュアリティに対して、エイセクシュアリティに関するアーカイブを拡大することで、交差的なアプローチを可能にする。

③ 強制的なセクシュアリティ：マクロな権力構造や不正義へのアプローチ

強制的なセクシュアリティとは、Adrienne Rich による「強制的異性愛（compulsory heterosexuality）」に影響を受けた概念である。強制的なセクシュアリティにより、「脱性化（desexualization）」を通じて疎外された集団による性的な表現が禁じられる一方で、一部の人々はむしろセックスすることを奨励される。例えば、障害者、レズビアン、トランスジェンダー、子ども、高齢者、肥満（people of size）、一部の人種差別にさらされた人々などをデフォルトとしてエイセクシュアリティにするように機能する。他方で、同性愛者や人種差別された集団のように、過度に性化（hypersexualized）された人々も存在する。これは「人口管理」であり、過剰性化と脱性化はともに社会的な統制と抑圧の形態として歴史的にも現在でも利用されている。強制的なセクシュアリティにより、ジェンダー、人種、能力、性的指向を巡る言説が、欲望が「適切」で「正常」なレベルになるように巻き込まれているため、強制的なセクシュアリティの交差する歴史と現在を検証する必要がある。

④　抑圧的な社会構造に抵抗するエイセクシュアリティ

第一章でより詳細に言及されるが、1960-70 年代のフェミニストは強制的なセクシュアリティに反対するプラットフォームを提供した。

上述のようなフェミニスト・クィアアプローチによって、強制的セクシュアリティの有害さを認識し、これらが白人性（whiteness）、規範性（normativity）、異性愛、健常身体性（able-bodiedness）と結び付いた条件の中でどのようにエイセクシュアリティを再生産しているのかを評価することを可能にする。

もう一つ採用しているのが、エロティックな枠組み（an erotic framework）である。フロイトやその後の精神分析の影響で、エロティックは性的に根ざしたものとした、性的な生命力として捉えられるようになった。それが後に、性欲やより広い意味でのセクシュアリティ全般と混同されるようになった。また、セクシュアリティを、ミシェル・フーコーの生政治的視点から捉える。これは植民地主義、白人性、富、能力（ability）、規範の観点から「適合者」に対して、身体の規制と規律、人口の健康の再生産のために健康とセックスを奨励する一方で、適合しないものを悪魔化して脱性化もしくは過剰性化することにより健康とセックスから疎外し、再生産するのを防ぐものである。

その上で Audre Lorde の “erotics” の語の使い方を参考にする。ロードは “erotics” を、人種化されたレズビアンの身体と反レイシズム的なフェミニストの闘争を組織化する、協力・連帯するためのエネルギーとして概念化するものであると捉え直している。

1 章以降では、イントロダクションで説明されたフェミニスト・クィアの視点とエロティクスなアプローチを用いて「フェミニズム」「レズビアニズム」「子ども」「高齢者」「インセル」を具体的に分析する。

(1)1 章では、1960-70 年代のアメリカにおける女性解放運動における政治的エイセクシュアルやセリバシーをエロティックな観点から言及する。「フリーラブ」や「性の解放」が強調されたこの文脈の中で、セックスと性的欲求（sexual desire）をフェミニスト的な主体にとって重要なものであるとみなすセックスポジティブなフェミニストから、エイセクシュアリティは否定的なものとして捉えられた。このような流れで出現した政治的なセリバシー / エイセクシュアリティ（political celibacy/asexuality）を、著者はセックスや人種に根ざした不平等の終焉を求め、ジェンダー化された規範や思想、家父長制、白人至上主義、異性愛などを破壊しようとする新たな方法を模索するクィアでエロティックなものとみなす。性の解放に伴い、男性との性行為に積極的ではない白人女性にとって、不感症（frigidity）や冷感症（coldness）は侮辱的で病的なものとして捉えられるようになった。他方で、黒人女性は「マミー」といった支配的なイメージによって脱性化させられ、白人

男性による性的搾取を正当化するものとして捉えられ、かつ性的に過剰であるとも描かれた。白人女性が中絶や避妊へのアクセスを求めていた間、有色人種の女性が矯正避妊手術と戦っていたことは、1960-70 年代における「性の解放」が、人種差別と性差別が続く状況の中で女性のセクシュアリティにとって「フリーラブ」でなかったことから目をそらすものである。

この中で、白人女性が結婚を拒否しながら自律を求める他方で、黒人女性は脱性化とセリバシーを押し付けられたことに対し、結婚することで自己決定と公共圏への進出を求めていた。しかし、セックスが白人至上主義の道具として使われることを問題視し、反人種主義的な観点からセリバシーを用い、人種差別の解体を志向した革命的なエロティクスをもつ黒人女性や、セックス・ストライキといった実践によって政治的セリバシーがされていた。

また、1960 年代の後半における Valerie Solanas のように、男性から強制された家父長制や、資本主義を完全な消滅と社会の再構築のために生殖を終わらせて男性文化の絶滅を希求する SCUM（Society for Cutting Up Men）を、ニヒリスト・エイセクシュアルと評価する。また、ソラナスの文章を支持した白人フェミニストたちは、家父長制やジェンダー抑圧から離れた世界観を形成するために、女性同士のエロティックな親密さを形成し、非家父長制的な世界を想像し、構築しようとした。これはセックスが健康的で善良であるという図式や、セックスをしないことへの病理化に異議を唱え、解放的な言説に批判的な視点を提供した。

最後に、レズビアン・フェミニズムにおけるセリバシーについて言及し、他者に親密に関わるさいに必ずしもセックスに基づかない身体間の親密さや性的欲望以外のエネルギーを主張するシスターフッドを読み解く。そこから、政治的なセリバシーや政治的なエイセクシュアルがこれらをもたらしたと結論づけた。

（2）2 章では、「レズビアン・ベッド・デス」（以下 LBD）という概念が分析されている。LBD とは「レズビアンは同棲してからセックスをしなくなる」と言う神話である。LBD が恐ろしいとされることを、不安の観点から分析し、セックスとセクシュアリティの喪失、それが帰属意識や関係形成、自己実現などと結びつき、セクシュアリティを取り戻すとことを強要する規律的な働きをしていると指摘する。このように、レズビアンでエイセクシュアルであることは病的にされている。これを LBD が中産階級、白人、健常性、新自由主義の文脈の中で最も声高に歌われる文化図式であると、映像作品を通じて分析をしている。著者はセックスが「正常」とされた人々にとって、幸せで健康的であるものとされ、これが安心感や秩序、社会的承認といった欲求への執着を構成していると言う意味で「残酷な

楽観性（cruel optimism）」の実践となっていることを生政治と絡めて主張する。LBD を克服し、レズビアンのレズビアンを祝福することとされ、他方で LBD によってセックスに失敗することはレズビアン・セックスの可能性に懐疑的な支配的言説構造に屈する悪しきこととされる。また、エイセクシュアルであることがレズビアンのアイデンティフィケーションを危うくするというおそれから、文化の主流から排除されることと脱性化に反対するレズビアンの可視化の流れに対し、エイセクシュアル・エロティクスの観点から読むことを試みることで、「誰がレズビアンとしてカウントされるのか」「どのような行為がレズビアンであるか」を複雑に読解していく。このように、社会的に正当なアイデンティティであること証明すると言う構造、つまり同化するべき「幸せ」自体に潜む構造を検討するために、強制的なセクシュアリティの文脈の中で「カップルの成功」と「アイデンティティ」が結び付けられているために「失敗」とみなされることを解き明かし、「セックスの約束（promise of sex）」とされているものをあらわにするエイセクシュアル・エロティクスの観点を提供している。

（3）3 章では、子どもについて述べられている。子どもには 2 つの競合する主張があるという。一つは性的に純粋でいられる権利があるという主張であり、淫らな視線から守らないといけないとするものである。他方で、子どもの脱性化を批判し子どものセクシュアリティの主体性を主張するものである。しかし、このような考え方は、実際は子どもが性的な大人になることを当然としており、能力が有り意欲的な白人市民になるというセクシュアリティを最終的なゴールとみなす進歩的な発達のモデルに組み込んでいるとする。ただし、このような無邪気さ自体は人種化されている。生まれながらにして罪を犯しているとみなされた黒人の人種化された子どもたちは、白人の無垢を維持するためのものであると歴史的にされてきた。これに対し、クィア理論は幼年期と成人期の区分に疑問を投げかけながら、子どもが脱性化されることを批判してきた。しかし、クィア理論は他方で子どもが性的に未熟で未発達で不完全であるとされていることを批判する。とはいえ、双方とも性的欲求を自然で、すでにあるものとして捉えている点は共通している。著者はクィア理論から排除されている子どものエイセクシュアルについて、エイセクシュアル「に」（into）成長することを考えることで、健常主義や植民地主義、白人性、ホモフォビアに根ざした発達という時間性をクィアすることを可能にする。また、世代を超えたエロティシズムに焦点を当てることにより、資本主義や異性愛規範、植民地主義のもとでの時間の呪縛（time spell）から逃れた別の非線形的な時間秩序を創造するエロティクスを見出せる。

（4）4 章では老年期のセクシュアリティに焦点が当てられる。高齢者は子供とは違って社会的に軽蔑されるものであり、資本主義的な再生産に役に立たないため、性的な欲望や

関心を持つに値しないものであるとみなされる。他方で、高齢期が国民国家のための生殖と生産、セックスと言う人生のプロジェクトを終えた休みと見なされことは白人性と繋がっており、他方で有色人種には老年期を迎えることを許さないような制度設計がなされている。このように、「使い捨て」可能な存在として構造化された高齢者は脱セクシュアル化される。他方で、脱性化に対抗するものとして「サクセスフル・エイジング」のように、活発で定量化可能なセックスと性的欲求が成功と健康な加齢に結び付けられるとき、身体的な衰えを「悪い加齢」が生み出される。その結果、セックスが必要なものであるという強制的なセクシュアリティを高齢者まで拡大することになる。そして、白人でありながらも、白人社会の恩恵からも排除された存在として象徴化されているスピンスターを例に、エイセクシュアルなエロティクスの過剰さ（excess）を述べる。セクシュアリティの欠如の象徴とみなされるのと同時に国家に、国家を構成するカップル単位には組み込まれていない、余計な（excess）ものとしてみられていたスピンスターは、アイデンティティを説明するセクシュアリティでは説明のできない余り物（excess）としてのエロティクスを持つ。スピンスターのもつエイセクシュアル・エロティクスは、資本主義の白人性、アイデンティティカテゴリー、誰かといることの現代的な解釈のどれからも溢れ出す（excess）潜在的なエロティクスを持つ存在であり、別の可能性を考えさせる。

最後にエピローグとして、インセルについて触れている。インセルはセクシュアリティが白人、異性愛者、健常者、カップルにとって自然で一貫してあるものであるという推定が働く強制的なセクシュアリティの中で生まれた存在である。つまり、男性が女性からセックスを期待でき、健康や幸福、充実感がセックスと結び付けられて理解された結果、女性からのセックスの拒否を白人至上主義の中で生まれながらに持っていた権利が十分に実現できていないことから生じている。他方で、Audre Lorde がエロティックについて他人を破壊することに利用すべきでないとしていた事に触れながら、エイセクシュアル・エロティクスは不正義や人種差別・性差別、健常主義と結びついた強制的なセクシュアリティを批判する。エイセクシュアル・エロティクスは破壊された世界を創造するためのものであり、この交差の中で考えることの重要性を主張して締めくくる。

3　考察

本書は、アイデンティティとしてのエイセクシュアルについての解説というよりは、強制的なセクシュアリティにいかに抵抗するかという観点からエイセクシュアリティを追求したものである。エイセクシュアルに共鳴するものを幅広く論点に入れることで、現在で

はエイセクシュアルとみなされていないものや、エイセクシュアルをアイデンティティとして認めさせようとする時に何を自明として見落としているのか、またそれが逆にエイセクシュアルを抑圧する強制的なセクシュアリティを再生産する可能性があることまでを視野に入れた分析をしている。

さらに、クィア理論やフェミニズムでもエイセクシュアルの存在は見落とされてきたが、これらの理論の発展可能性に開かれていることは、本書が人文・社会科学の分野における学術書として初のものであるという意義をより高めているであろう。

他方で、著者はアカデミックな専門家が持つ権力性や構造には触れていない。しかし、当事者によるアイデンティティの利用を拒否し、影響力のある学者としてエイセクシュアリティをより広く論じることが持つ権力性に対し、あまりにも無自覚であるように思われる。「科学」が「真実のアーカイブ」となることを鋭く批判するが、エイセクシュアリティをアイデンティティとすることや承認を求めることは、必ずしも規範を強化するとは限らないだろう。また、例えば、本書のタイトルを検索するだけでも、コミュニティに近い立場から書かれたと思われる複数の書評ブログなどが見つかるが、この点などに関して批判や怒りを綴ったものが見られる。また、Kadji Amin は本著に言及しつつ、クィア、トランス、エイセクシュアルの学術的分析が生活実践から分断されつつあることの倫理的な問題を述べている（Amin 2023）。たしかに、「コミュニティ」やエイセクシュアルをアイデンティティとしている「当事者」に必ずしも認められる必要はない。とはいえ、当事者の分類実践そのものにクィアな可能性を見出してもよいのではないか。

加えて、エロティクス概念を用いた分析についても本当に必要なものであるか、疑問は残る。確かに親密な関係性や「本能」的に「性欲」などの性的なものを読み込みがちな文化の中で、エイセクシュアルなエロティクスを探すことは重要であろう。他方で、エロティクス・アプローチに対する批判もある。例えば、Maggie McDowell は、オードリー・ロードのエロティクス概念が用いていないフロイトとの対比を用いることで、逆にセックスとの関連で誤読される可能性や、あまりにも抽象的過ぎる点を指摘する（McDowell 2022）。評者も McDowell の後者の指摘に賛同する。本著以降、著者は複数の論考でエイセクシュアル・エロティクスの解説やそれに基づく読解を試みているが（Przybylo and Gupta 2020, Przybylo 2021）、エイセクシュアル・エロティクスの概念自体は本著以上にはほとんど掘り下げられておらず、分析の際も曖昧なままで明らかにされていない。そのため、分析対象に性的ではない可能性が見いだせ、権力との関係さえ主張できればエイセクシュアル・エロティクスと呼べてしまうようなものになっているように見える。「性的である」ことを前提とする規範や文化、強制的なセクシュアリティとの関係を明らかにすることや、

そこから漏れ出すような関係性に焦点を当て、その関係が「エイセクシュアル・エロティクス」であると述べて終わるのではなく、よりそれを具体的に分析することが求められるのではないだろうか。

参考文献

Amin, Kadji, 2023, "Taxonomically Queer?: Sexology and New Queer, Trans, and Asexual Identities," *GLQ*, 29（1）: 91-107.

McDowell, Margaret Rose, 2022, "Against Compulsory Sexuality: Asexual Figures of Resistance," Ph.D. Dissertation, Department of English, Duke University.

Przybylo, Ela, and Kristina Gupta, 2020, "Editorial Introduction: The Erotics of Asexualities and Nonsexualities: Intersectional Approaches," *Feminist Formations*, 32（3）: vii-xxi.

Przybylo, Ela, 2021, "Ace and Aro Lesbian Art and Theory with Agnes Martin and Yayoi Kusama," *Journal of Lesbian Studies*, 26（1）: 89-112.

（かめやま　てつひろ・修士課程）